シンコウカイ
親江会だより

No. 272号 2026年10月11日発行
発行：親江会（江戸川区原爆被害者の会）
事務局：〒132－0033
江戸川区東小松川3－35－13－204
電話：090－3680－6499
郵便振込取扱票：00110-4-0058774　親江会

第46回江戸川区原爆犠牲者追悼式

積み重ねてきた思いを繋ぐ

7月19日(日)、葛西区民館ホールにて第46回江戸川区原爆犠牲者追悼式が執り行われました。今年はまだ梅雨が明けていないにもかかわらず梅雨明けのような晴天が広がり、日差しが眩しい日でした。

開会の挨拶で山本宏親江会会長は、「被爆体験の継承は年々難しくなっている。親江会の被爆者は現在84名。昨年は会員の被爆体験をインタビュー ビデオに収録したり、被爆証言集『鳩になって』第6集に残すことができた。それを広島・長崎の原爆資料館、江戸川区内の小中学校、図書館に寄贈した。これらが次の世代に平和の大切さを伝える基礎となることを、そしてご参列の皆様が平和への願いを未来へ繋いでくださることを願います」と話されました。

また、東友会の興田茂執行理事は、「核兵器禁止条約が国連で採択されてから時間だけが過ぎている。条約を批准させるための努力が足りないと感じざるを得ない。中近東でも理解に苦しむような国同士の駆け引きや、大統領の独善的な行動が目につく。それでも私たちは、先人が積み重ねてきた成果と思いを引き継ぎ努力する」と力強く挨拶されました。

被爆体験報告は、2度目の登壇となる山本会長でした。8年前の前回は、辛い感情が込み上げて読めなくなり、司会の原田佳子さんに代読してもらったことを反省し、今回はメモを参考に、「語る」スタイルの報告となりました。

若い世代の発表では、小学生のときに親江会の平和教育を受けた現在中学3年生の生徒が、今でもそのときに感じた悲しみや怒りを忘れず、戦争や平和に興味を持ち、さまざまなイベントに参加していることなどを発表しました。また、区立高校の生徒は、授業で観た沖縄戦をモチーフにしたアニメで、戦争は自分たちにも身近な問題と実感。お互いを認め合い、感謝の気持ちを忘れないことが大切だと発表しました。（詳細P8）

その後、隣の滝野公園内にある追悼碑に献花して追悼式は終了となりました。来年も同じ時期に追悼式が行われます。ぜひご参列ください。

変わらない平和への願いを繋いでいくことに意義がある

生き抜いたヒロシマの事実

被爆体験　山本　宏

私の被爆体験は、一度ここで発表しました。同じ年に家内（被爆者）が亡くなっていたので、メモしていた家内の被爆の実相と私の実相体験を話そうと文章に書いてきました。ですが、当時のことを思い出しながら書いたものですから、読み始めたらその時の辛い思いが蘇ってしまいました。

その当時は、（被爆の）辛い思い出は忘れようと、忘れることに一生を賭けていました。それが今度は、思い出しながらレポートを書いたので、辛い思い出が胸に込み上げてしまい、読めなくなってしまった。途中から司会の原田佳子さんに代読をお願いしました。それが8年前です。

それ以来、被爆の実相体験は読むのをやめました。思い出すままに話せば感情が湧き上がらずに済むので、今回もメモを見ながらの発表とさせていただきます。

ファットマンの実物大パネルを背に被爆体験を語る山本会長

豆ご飯が嫌いになった理由

私は1938年、昭和13年の1月1日生まれ、現在88歳です。被爆当時、国民学校の2年生。それまでは満州にある金州の小学校に通っていました。

金州は土地がすごく広くて、水平線ではなく、地平線が見えるくらい。遥か彼方で空と大地がひっついている、そんな土地でした。近くには小高い丘があり、そこを超えていくと金州城があるだけで、他にはなにもない土地です。

戦後70年の頃、金州に行ってみたんですが、その時も、それほど家は建っておらず、平原は広いまま。日本よりなんと豊かな土地だろうと感心しました。

小学校1年生を終わる頃、父の転勤により日本に帰ってきました。その後、数ヶ月で原爆に遭ってしまい、それからが辛かったんですが、辛い話は短くするため、小学校のことを話します。

満州から汽船で内地に帰るとき、普通なら1日半くらいで日本に着くのに、1週間かかった。機雷があるので夜は進めず、昼も機雷を避けながら進むので、何度も何度も朝鮮半島のあたりを行ったり来たり。だから、「この島のあの街は昨日見たはずだ」なんて思ったこともありました。

満州におるときは、日本の食糧事情があれほど悪いとは全然知りませんでした。それがわかったのはその船の中でした。朝昼晩と

食事が出るのだけど、豆ご飯ばかり。それも、大豆にお米がちょろっとひっついたもの。戦後、船だけでなく病院などでもやっていましたが、米を蒸気で炊くんです。蒸気で炊いたご飯というのは、本当にまずい。そのまずい豆にご飯つぶが付いただけの豆ご飯を1週間食べました。おかげで、今だに豆ご飯は大嫌いです。

子供心に、「そんなに食べ物がないのかな」と思ったんですけど、帰ってきて、原爆が落とされる前も食料は豊富ではなかったです。大根をお米と同じくらいの大きさに刻んでご飯の量をかさ増ししたり、ご飯も普通のご飯ではなく雑炊みたいなのが終戦まで続きました。でも終戦後はもっと酷かった。広島の田舎でも、お百姓さんにお願いして分けてもらうまでは、食料はほんとうに難儀しました。親はさぞ大変だったろうとおもいます。

吹き飛んだ体と記憶

ここからがいよいよ悲惨な話です。日本に帰ってきた当時は、空襲警報が鳴ったら学校へは行かなくて済んだ。解除になったら、地域の班で行くか否かを決めていました。

その朝、警戒警報が鳴りました。その時はまだ家にいたんですが、解除のサイレンが鳴ったので学校に行く支度をして、道路で同じ班…小学校4、5年生は学童疎開で田舎のお寺や学校に行っていましたから、小学生は1年から3年生まで、その上に高等学1、2年がおって、20人くらいおりました。その班で、学校へ行こうかどうしようか、道路で輪になって相談していたんです。上級生は道路の向かい側にあるお屋敷の石段に腰掛けて、我々下級生は道路側で立って話をしていました。

私はたまたま街道にある、ひとかかえも、ふたかかえもある大きな松の木の陰に立っていたんです。意識していたわけじゃないですが、その時、一瞬「バッ」と光った。その瞬間からしばらくは覚えていません。爆風で吹っ飛ばされて気絶していたんでしょう。気がついたら、世の中が薄暗いんです。いろんなものが燃える煙とか、粉塵が舞っていたからです。時間は相当経っていた、というのは後からわかったことですが、黒い雨が降った後でした。黒い雨のことはぜんぜん覚えていないけど、道路でひっくり返っていたので私の上を通っていったはずなんです。でも、それにも気がつかないでいました。

薄暗い中をあわてて道路の反対側のお屋敷に飛び込んだら、お屋敷をすぐに通り抜けて裏道に出てしまった。屋根も壁も吹っ飛

御幸橋西詰めにて、被爆後、最初に撮られたと言われる写真。元中国新聞社カメラマン・松重美人さん撮影

んで何もないんです。驚いて急いで家に帰りました。当然、うちも屋根は飛んでいて、柱と家具が少々残っているだけ。昔の日本家屋の建具は紙とガラスです。ガラスが粉々になって飛ぶんです。割れると危険だから和紙をいろんな模様に貼って補強していたんですが、そんなもの何の役にも立たなかった。爪よりももっと小さい破片になって吹っ飛んで皮膚に突き刺さった。だから多くの人が被害を受けたのが窓ガラスでした。

屋根がないのはうちだけでなく、どこの家も同じです。柱が立っているだけ。爆心地に近ければ、その状態で燃えてしまう。うちの方は飛ばされただけで、火は着きませんでした。爆心地から2．5キロのところでした。

火傷と後遺症との戦い

私は道路にいて後ろから熱線を受けたので、後頭部にかなりの火傷を負いました。何日かしたらハエが化膿したところに卵を産むんです。それから2、3日すると今度はウジが動く。それがものすごく痛い。薬も何もなくて、昔から火傷には小便つけたら治るゆう話があったので、わたしも小便をつけました。でも、小便をつけるとよけいハエがよろこんで来るんです。だから、いっぱい卵を産まれてひどい目に遭いました。火傷を負った人は化膿して、ハエとウジ虫にやられた人がいっぱいいます。本当に筆舌に尽くしがたい痛みでした。

中学2年生になった頃、進駐軍はまだ武道の稽古を禁じていたんですが、警察の道場だけは柔道も剣道もやっていた。そこへ中学2年から高校まで柔道を習いにいってました。

頭の後ろを火傷していたので、柔道をやると襟をもって引くので、道着の襟が擦れて血まみれでした。いつも擦られて、弱い皮膚が血を吹く。だから柔道着は首のところが赤いのではなく真っ黒でした。火傷は本当に痛い目に遭いました。

大阪北区で撮影された戦災孤児たち。手前の子どもは空き缶で調理し、奥の子どもは何かに突っ伏して眠っている

折り鶴献納者の皆様

（順不同、敬称略）

泉福寺　杉山千代
泉福寺　五十嵐つね子
南葛西第三小学校
鹿骨東小学校
東京都教職員組合江戸川支部
江戸川生活者ネットワーク
江戸川健康友の会
新日本婦人の会江戸川支部
カトリック葛西協会
なごみの家長島桑川
モロオカ　セイジ
二之江中学校　千野裕司
南葛西第二中学校
東京土建江戸川支部女性の会
江戸川区職労女性部
熊野会母の会
とまとの会
原爆展参加者
滝沢やすこ後援会
内海　治子
アヒンサー海工房　熊瀬紀子
相本倶楽部

ありがとうございました！

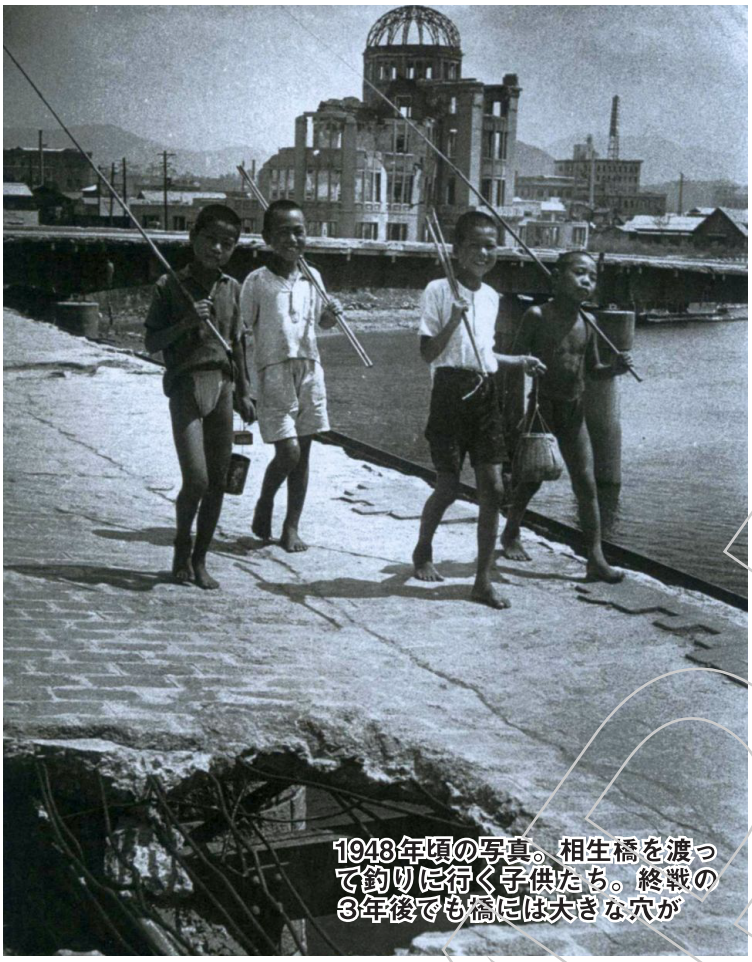
壮絶な記憶

今、広島には100メートル道路ゆう広い道路がありますが、あれは建物疎開(延焼を防ぐため、建っている家を壊して空き地を作ること)の跡地です。被爆の前頃、中学1、2年生の女学生たちが建物疎開の手伝いをやっていました。子供たちが動員されて、家にロープをかけて引き倒していたんです。その作業をしているところに原爆が落とされた。女生徒たちの多くが亡くなってしまったわけです。

被爆の絵にあるのは幽霊のようにみんな手を前にあげて歩いていますけど、これには理由があって、熱風で爆心地に近い人ほど焼けているわけです。電子レンジの中に手を突っ込んだのと同じことです。血管が皮膚と一緒に弾けて垂れ下がっとる。だから、手の置く場所がなくて、中空に幽霊のように浮かしている。私の家の前もそんな人々が歩いていました。

そして、これが原爆の後の一番辛いこと…。私が通っていたのは己斐(こい)小学校いうところなんですけど、そこが避難場所に指定されとったようで、被爆してそこに行った人たちが、その日か次の日には亡くなってしまうんです。校庭に大きな幅の広い穴を掘って、2、3日の間に集まった2100～2200人の遺体を、木材と一緒に山積みにして毎日焼くんです。でもまだ戦時中で、どこの家庭でも電球の周りに黒い布を被せて光が漏れないような生活を送っていた。なので、夜、外で火を燃やすわけにはいかんのです。だから、朝、火をつけて焼き始めても、夜は消す。原爆が落とされたのが8月6日ですから、終戦の日までは何日もあるんですね。その間、毎日火をつけたり消したりするんです。うちは、広島市の西側の山間に近い街ですから、匂いがこもってすごい匂いでした。学校だけでなしに、空き地があれば遺体を焼いていましたから、街中が人体の焼ける匂いですごかった。野焼きなどで、動物を焼いても、あんな匂いはしないんですが、人間が焼ける匂いいうのはひどい匂いでした。

その己斐小学校は、東友会にも小学校の先輩がいて、その人たちから聞いた話では、戦後、食糧難のため、学校の校庭にさつまいもをたくさん植えた。収穫時期になって子供たちが持ち帰ろうとして掘ったら、芋と一緒に骨がたくさん出てきた。気持ち悪がって、食糧難の時代なのにだれも芋を持って帰らなかったそうです。



1948年頃の写真。相生橋を渡って釣りに行く子供たち。終戦の3年後でも橋には大きな穴が

私はその頃は他の小学校に替わっていました。

戦後75年の節目のとき、慰霊のため小学校に行きました。慰霊碑ができていたんですけど、私が通よっていた頃より、校庭が4メートルかさ上げされていました。つまり、すべてのものを埋めてしまったんです。そこで今の子供達が遊んでいる。私はそれを見てがっかりしました。(編集部注:《己斐小の校庭からは被爆4年後、遺骨2千体が掘り出された。》中国新聞2010年7月25日朝刊より)

1954 年頃撮影。この頃もまだ建物は粗末なまま。ボロ拾いがリヤカーを引く

貧しい戦後を生きた子供たち

中学校に入っても食糧難は同じで、親たちはいろいろなことをやっていたと思うんです。当時、広島でも可部線とか芸備線とか、山の方にいく支線があったんですけど、それはいわゆる闇列車いうんですか、食料を求めて汽車に乗って食料を持ち帰るんですが、それを警察が摘発するんですね。食料を求めるのになんで警察が取り締まるのかよくわからんけど、それを商売にするのを防ごうとしていたのかもしれない。だけど、ほとんどの人が自分のための食料を買い出しに行ってるわけです。しかも、田舎の人はお金では売ってくれず、かといって指輪とかはぜんぜん値打ちがない。女の人の晴れ着の着物なんかがどんどん食料に替わっていったわけです。そうやって持って帰ると、列車で警官が取り締まっている。他の市ではどうか分かりませんけど、広島では普通の人が捕まっていました。

でも、我々は子供だったけど、そういうことに対応するのは力が強かったです。食べられる小動物はいろんなのを飼いました。しかもお金のかからないうさぎとか鶏とか、そういうのはどんどん飼って繁殖させて、それを大人に売りつける。万引きとかはやっていないけど、金儲けすることは仲間といろいろやりました。

競馬場が近くにあって、戦後すぐだけど競馬をやっていて、厩舎に行って馬喰や騎手たちの、「今

追悼碑奉安者

2025年8月～2026年7月

松岡　優 (92)
永野　慶子 (86)
大野　良子 (88)
石井イツ子 (96)
今澤　一信 (93)
貫　泰夫 (88)
川原　勝美 (89)
加藤カズコ (90)
斉藤　敏司 (78)

以上9名(敬称略)

広島と長崎の空に帰られました。
お悔やみ申し上げます。

日は何レースと何レースが出来レースだ」という立ち話を聞いとるわけですね。で、仲間同士でお金をかき集めて、馬券が買えるお兄ちゃんに頼んでそれを買ってもらう。絶対入るんですよ、彼らが仕組んだレースですから。もう子供とは思えんくらい野放図にお金を稼いでいました。

原爆の後の広島は、他の市に比べて戦災孤児がうんと多いわけです。家が全部吹っ飛ばされて、親戚縁者も全部なくなり、子供たちが疎開から帰ってきても行くところがない。だから街でうろうろして、かっぱらいするとか食べることに一生懸命なんです。それが成長していったら何になるかいうたら、今で言うならヤクザ、当時は愚連隊と言った。漫画に出てくるような世界でしたが、それもこれも原爆が作った孤児たちが、成長してできた街というわけです。

広島はヤクザの街と言われて映画にもなったけど、生やさしい物じゃなかったです。保護者がいない子供たちが生きる術でそうなったんです。我々は親がいても、お金を稼ぐ方法を自分たちで覚えてきました。

一番しゃくにさわったのは、戦災孤児たちが、似島(にのしま、編集部注:戦災孤児らを保護、収容した施設。「広島県戦災児教育所似島学園」)などの大きな施設に預けられた子たちは悲惨な目にあったんですね。それで脱走したりして、大きくなって悪くなっていったんです。

それなのに、アメリカの保護を受けた孤児たちは、ノートも今でいう大学ノートみたいな、罫線のあるすごく立派なノートを使っているんです。えんぴつも、消しゴムのついたあの黄色いえんぴつがあるじゃないですか、あれを使っている。勉強しようと学校に行っても、本も鉛筆もない時代に、もう、うらやましゅうてうらやましゅうて。なんで親がおらんかったらこんなにいいもん持っとるんか、親がおる我々には何もないと、そんなふうにひがんでいました。

父親は軍人だったんですけど、広島に復員してくる兵士たちを武装解除させて職業を持たせる世話をずっとやっていました。戦後もMPのジープが家の周りにいて自由にできなかった。親も不自由だった思うんですけど、私はそんなのを掻い潜って過ごしてきました。これが赤裸々な被爆の実相いうのではないかなと。本当にこんな世界を生きてきたんということを聞いてほしかったです。時間が来たそうでこれで以上です。

新聞やテレビでは見られない生々しい
被爆体験と被爆後の実相が語られた

生徒たちの発表

小岩第四中学校３年　阿部　暁

平和教育で繋がる縁と輪

私は３年前の夏に北小岩小学校で親江会の皆さんの平和学習を体験しました。このとき友だちの演じた、『サダコの４６７５日』や、高比良さんと山本会長のお話を聞き感じたことがあります。まず、当時の私たちと同じとしごろのサダコさんが、なんの罪もないのに急に体調を悪くして、最後には亡くなってしまって、本当にかわいそうだと思いました。

パワーポイントを使い、写真や資料を見せながら講演する阿部くん

一方で、この原因となった原子爆弾や、それを使って戦争をした国や大人たちに強い怒りを感じました。それから私はずっと平和と戦争について考えています。

その後、秋に行われた戦争展では、私のクラスの友だちがまた、『サダコの４６７５日』を演じ、やはりひどい被害にあった沖縄県の祭り、エイサーを踊りました。このことが縁で、戦争展を見に来てくださった方と私たちのクラスは交流を続けることになりました。

続いて学校で行われた学習発表会で、私たちは『戦争の愚かさに怒り、平和を願う歌』、『ＨＥＩＷＡの鐘』を合唱しました。私たちは見に来てくださった親江会の方や保護者、地域の人たちに私たちの思いが伝わるように全力で歌いました。また、同じ親江会の平和学習を体験し、偶然にも同じ歌を学習発表会で披露した台東区の小学校の人たちと交流することができました。戦争展と同じで、平和学習を通じて平和を願う輪が広がることを感じました。

葛西祭りのお手伝いに来てくれました（前列左）

親江会の方々には、その後も卒業を祝う会などに来ていただき、山本会長の『原爆行』の詩吟も聴かせていただきました。

春になり、私は小岩第四中学校に進学しましたが、縁あって、葛西区民祭りで親江会の模擬店のお手伝いをすることになりました。このとき、さらに多くの被爆者の方と出会い、また直前に被団協のノーベル平和賞受賞があったので、直接お祝いの言葉を伝えることができました。

ただこのとき、私がショックを受けたのは、模擬店の横の原爆犠牲者追悼碑にゴミを捨てていったり、遊び場にしている人が少なからずいたことです。その日はかなり怒りの感情がわいてきましたが、あとになって考えてみると、そういう方たちは「追悼碑」についてよくわかっていないんだなあと思いました。知ることはと

ても大切で、平和学習がどんどん広がっていくことが必要だと思いました。

そのときの経験もあり、その後の平和コンサートで朗読の会の方々に交じって、『原爆の詩』を朗読することになりました。平和を願う気持ちが伝わるように、一生懸命表現しました。

今、私は中学3年生になりました。初めて平和学習を体験してから3年の月日が経ちました。当時のウクライナの戦火は今も続き、さらにガザや、最近ではイランにも広がっています。平和学習で学んだことはその場限りにするのではなく、ずっと心に刻み、これからも戦争や平和について考え、行動していきたいと思っています。私は今年も3年連続で葛西区民祭りのお手伝いをしたいと思っています。そして、平和コンサートにまた参加したいと思っています。

葛西南高校 生徒会長 3年 奥田美紗

平和は違いを認め合うこと

本日は、平和について触れる貴重な機会をつくってくださった皆様に、心より感謝申し上げます。日本は今年で戦後81年を迎えます。私たちが日々過ごせている日常は、決して当たり前ではないことを噛み締め、私たちが今日という日を迎えられたことに、感謝の意を表します。

昨年、日本は戦後80年という節目を迎えました。節目を迎えたから終わり、ではなく、若者世代が平和についてより深く考え、後世に語り継いでいくことが今を生きる私たちに求められていることだと考えます。

私は、歴史の授業が得意ではありません。「今を生きているのだから過去のことなど知る必要はない」と考えていました。ですが、私の考え方を変えたのは、学校で『ｃｏｃｏｏｎ～　ある夏の少女たちより～』というアニメを観たことがきっかけでした。

太平洋戦争末期の南方の島・沖縄を舞台に、女子校に通う「サン」と「マユ」ら少女たちを描いた物語です。授業や陣地構築の明るい日常から一転、壕の中の野戦病院へ駆り出され、看護隊として負傷兵の世話という過酷な極限状況に直面していく少女たちの運命と絆を綴った作品です。

私はこの作品を見て、目の前で友人の命を奪われることの残酷さ、壕の中で多くの負傷者や重症者を目の当たりにするという現実、その辛さは計り知れないものだと感じました。

もし、自分がその時代に生きていたら、さっきまで隣で笑っていた友人が突然いなくなってしまったら、と考えた時、戦争は決して私たち若者世代と関係のない、遠い昔の出来事ではなく、今を生きる私たちにも身近なことと実感しました。むしろ、私たち戦争を経験していない世代だからこそ、考えていかなければならないと思いました。

平和とは、戦争がないことだけではなく、「それぞれの違いを認め合うこと」、「感謝の気持ちを忘れず言葉にすること」、「思いやりや気遣いから生まれること」だと思います。その一つ一つの積み重

ハキハキした口調ではっきりと自分の考えを発表する奥田さん

ねが、平和につながっていくのではないでしょうか。

私たち学生は、戦争を経験した世代ではありません。だから過去を知らなくていいのではなく、真実を知り、知識を広げていくことが大切です。戦争を経験した方々のお話に耳を傾け、その思いを次の世代へつないでいくことが、私たちにできる平和への第一歩です。今日この追悼式を通して、1人でも多くの若者世代が平和について考え、自分に何ができるのか見つめ直すきっかけになれば幸いです。

結びに、この平和な日常が多くの方々の尊い命と努力の上に成り立っていることを忘れず、今日も大切に過ごしていきます。戦争により、亡くなられたすべての方々、尊い命を奪われたご遺族の皆様に、尊敬の意と哀悼の誠を捧げ、私の言葉とさせていただきます。ありがとうございました。

広島派遣

原水爆禁止2026世界大会に行ってきました　曽我篤

志を同じくする仲間に勇気と希望

2026年8月4日より、二泊三日の旅程で原水爆禁止世界大会に行ってきました。団長の遠藤喜世志さん(原水協)を筆頭に、9名からなる江戸川代表団の一員として、羽田空港から飛行機に乗りました。

広島空港に着いてバス乗り場に向かう時、目に飛び込んできた巨大な壁画に心を奪われてしまいました。この壁画の名前は『核のない世界へ 広島メキシコ友好壁画』です。メキシコ人壁画画家姉弟のアドリー・デル・ロシオとカルロス・アルベルト・GHが、2025年10月15日に完成させました。空港正面(北側)の壁面には、折り鶴を飛ばそうとする禎子さんが描かれています。またその左側、東の壁面には禎子さんと向き合うようにアルフォンソ・ガルシア・ロブレス(ラテンアメリカ及びカリブ核兵器禁止条約を成立させた、メキシコ人初のノーベル平和賞受賞者)、山口仙二(国連本部で「ノーモア・ヒバクシャ」演説をした長崎の被爆者)、森滝市郎(被団協初代理事長、広島の被爆者)の三名が大きく描かれています。広島空港に行く機会がありましたら是非ご覧ください。一見の価値ありです!

広島市内でバスを降り、みんなでお好み焼きを食べてから、「江戸川原水協」の旗を持つ事務局の丸宗市さんに、原爆ドームや爆心地等、原爆関連施設の案内をしてもらいながら炎天下を歩きました。

1975年の8月6日に親江会が植樹した平和公園のクスノキの石碑には、「東京都江戸川区原爆被害者の会親」と刻まれていました。50年の時間をかけて石碑が少しずつ埋まっていった結果、

空港ビルの壁画。平和への願いをアートで発信しようと、広島とメキシコのアーティストたちが制作した

盛り上がった閉会総会

「江会」の部分が地中にめり込んでしまったのでしょうか…。親江会の記念植樹の碑、原爆の子の像の下に千羽鶴を献納してから、グリーンアリーナの原水禁世界大会に向かいました。

開会総会の参加者は２７００名（オンライン参加を含むと３２０６名）。世界各国から様々な参加者が集まりましたが、志を同じくする人々がこんなにもいるということに大きな勇気をもらいました。

それにしても広島は暑い！東京よりも更に厳しい炎天下、今年初めて買った日傘が暑さをいくらか和らげてくれましたが、それでも暑さは相当なものでした。

２日目の８月５日、私は分科会８「反核平和の文化」に参加しました。前半は、被爆体験集の編纂、音楽や演劇、基町高校の『原爆の絵』等、取り組み事例の紹介を。後半は、朗読グループのワークショップに参加して『木の葉のように焼かれて』等の朗読体験をしました。夜は『反核平和ペンライト行動』に参加しました。

夕食を終えて20時に相生橋に行ってみると、すでにペンライトやメッセージカード、色々な旗を持つ人々でごった返していました。私も核兵器廃絶を願いながらペンライトをかざしました。日本被団協事務局長の濱住治郎さんがいらっしゃったので、都教組江戸川支部の荒川里彩さん、区職平和委の眞利子律子さんと一緒に記念撮影をしました。

最終日の８月６日は記念式典当日です。セキュリティチェックを通って、警備の隙間から式典挨拶の声に耳を澄ませましたが、セミの鳴声のせいでよく聴き取れませんでした。特に８時15分の黙祷の間、止まないセミの鳴声と共に、遠くの方から野次のようなものが聞こえてくるのには閉口しました。彼らには犠牲者を悼む気持ちはないのでしょうか…。

式典が終わってからグリーンアリーナへ向かいました。世界大会の閉会総会の参加者は３４００名。最高潮の盛り上がりに、核廃絶の決意を新たにしました。

その後、式典が終わってセキュリティが解除された平和公園の追悼碑に向かいました。スピーチマイクを取り囲んでいた防弾ガラスを確認し、手向けられた花束の中から東友会の名前をみつけました。

その後、広島国際会議場地下で開催中の『原爆の絵画展』を見に行きました。昨年開催した『被爆80周年 原爆展』で展示した、基町高校の『原爆の絵』の原画展です、

写真左から、荒川さん、濱住さん、眞利子さん、曽我さん

見ないわけにはいきません。実際に目にした約40点の原画は、レンタルしたパネルの2倍以上もの大きさで、筆遣いも生々しく、真に迫る勢いがありました。

閉会総会で講演をした被爆者・伊藤正雄さんの証言を拝聴し、石原里緒さん(元基町高校生徒)が2023年に制作した『あまり思い出したくない光景～火葬される遺体の山～』もありました。そして、今年完成したばかりの新作10点の出来栄えもすごいもので、基町高校の真摯な取り組みに、尊敬の念で一杯になりました。

今回、初めて原水爆禁止世界大会に参加しましたが、核廃絶の志を持つ人々がこんなにも沢山いるということに、勇気と希望をもらいました。今回の経験を糧に、親江会の活動を今まで以上に推進していこうと思います。良い機会を与えていただき、本当にありがとうございました！

追悼碑参拝式

8月6日(木)、滝野公園にある原爆犠牲者追悼式前で、江戸川区役所幹部職員の皆様による参拝式が行われました。

前夜まで降っていた雨がウソのように晴れ上がり、陽射しは強いものの、風は意外なほど爽やかな朝でした。蝉時雨の中、斉藤猛江戸川区長をはじめとする118人もの幹部職員の皆様がご参拝くださいました。

追悼碑に向かって立つと、広島、長崎の方角に向き合います。この日は広島の祈念の日。江戸川区立の公園に、追悼碑を建立させていただいき、さらに毎年、祈念の日にご参拝いただく区長、職員の皆様への感謝と、広島、長崎の空に鎮魂を祈りました。

斉藤区長はじめ、区幹部職員の皆様が参拝してくださいました

キャンドル行進

参拝式のあった8月6日(木)の夕方、同じ滝野公園からキャンドル行進が行われました。

18時30分、追悼碑前を出発し、清新町にある健康サポートセンターまで30分ほどの道のりを、核兵器廃絶を訴えるシュプレヒコールを上げながら約40人で行進しました。親江会からは高比良さんが参加し、あいさつで非核三原則の絶対保持を訴えました。

出発式であいさつする高比良さん

交流会報告　宇田川耕史

減少する平和教育と引き継がれる可能性

今回から追悼式の運営、進行の主体が、追悼碑の会から親江会に移行し、式典から献花まで、心配ごとも多かったようですが、滞りなく終えることができ、ホッとした雰囲気の交流会でした。そこでこんな話が交わされました。

山本会長は証言原稿を用意してあったそうですが、読むときっと感極まり詰まってしまうだろうと、違う内容に変えたそうです。「長い話になって…」と恐縮されていましたが、「よかったです」という声が多かったそうです。

「空襲の体験はもちろん大変だけど、その後も本当に大変だった」と共感する発言もありました。

司会の伊藤さんは、山本会長の話に聞き入る会場の雰囲気を感じ、所定時間をオーバーしても止めなかったそうです。

毎年、核兵器廃絶・戦争のない世界への希望を感じる「若い世代」ですが、今回も高校生、中学生の発言と行動に、大いに感動させられました。

一方で、折り鶴を献納してくださる学校、平和教育を実施する学校が減ってきている現実があります。平和教育の実践が引き継がれていかない学校の窮屈さと、「辺野古事故」から続く平和教育へのバッシングなどで、学校現場の委縮が影響している現実があります。

しかし、折り鶴を献納していただいた学校に、折り鶴再生紙で作った感謝状が贈られ、大変喜ばれているということもあり、これまでの折り鶴献納校や平和学習実施校、親江会の出前授業実施校などへ、個別に追悼式への参加や折り鶴の献納をはたらきかけてもよいのではと話し合いました。

学校として、生徒会や児童会として取り組めなくても、心ある教員はたくさんいるので、1人でも取り組むことはでき、その可能性も広がります。今回も、学級で折り鶴に取り組んだ若い教員がいたそうです。子どもたちは、自分で何かすることで体験や考えを深めることができます。

毎年参加している葛西南高校では、来年の発言者がもう決まっているそうで、学校での継承が続くことを期待します。

運営など、従来体制からの引き継ぎを十分にしたつもりでも、いくつかの反省点、改善点が交換されました。

準備や片付けに必要な人手と時間の設定、受付の場所や机の並べ方、合唱団の当日リハーサルをどうするかなど、検討が必要です。折り鶴を折る場所も確保したいです。また、「きょうちくとうの歌」を平和コンサートはもちろん、親江会の行事でいつも歌ってほしいし、歌いたいという要望もありました。

追悼式の感想や反省は、絶やすことなく追悼式を続けていく決意の表れです。ヒロシマ・ナガサキを忘れてはいけないという思い、核兵器廃絶と今なお世界各地で続く戦争や紛争を、1日でも早く終わらせたいという願いと決意の詰まった交流会でした。

第26回 戦争展2026ミニミニ報告

10月3日(土)と4日(日)、船堀タワーホール展示室にて戦争展inEDOGAWAが開催されました。親江会の今回の展示は、銀林元会長の遺品の中から、ご遺族様から寄贈いただいた、貴重な丸木位里・丸木俊ご夫妻直筆の「鳩と母子像」の絵を中心に、泉福寺に残っていた未公開資料の発表でした。

また、ステージでは、古今亭菊太楼さんの新作落語『母のお守り』や菊太郎さん、山本会長、高比良さんの3人のトークショーなど。詳細は次号でお知らせいたします。

▲会場の様子は昨年のものです

◀色紙に描かれ額装された「鳩と母子像」の絵は、丸木位里氏の直筆です

広島大学のイベントで江戸川区 原爆犠牲者追悼碑が紹介されました

全国各地の原爆や非核、平和関連の碑を調査・研究されている広大大学院の熊原教授から親江会ホームページを通じて連絡をいただき、『鳩になって』第6集に掲載した追悼碑の歴史を紹介したところ、その建立の経緯について丸木位里、俊画伯の業績と共に大学の企画展で紹介されました。

『全国に刻まれた原爆・非核平和の記憶ー700基のモニュメントをたどるー』

その中で特に、「江戸川区滝野公園の原爆犠牲者追悼碑は、被爆地以外の地域に建立された追悼碑として大変意義深く、碑の造形や建立の経緯にも特色があることから、研究成果の中でも重要」とご判断いただきました。追悼碑の祈りが広島まで届いたのでしょう。

全国に平和に関する祈念碑が1700もあることに、平和を願う人々の多さが窺える

被爆81年目 広島・長崎
『あの日を忘れないための演芸会
～日本から世界へ～』

6月13日(土)お江戸両国亭にて、落語家で親江会会員の古今亭菊太楼さん主催の《被爆81年目 広島・長崎『あの日を忘れないための演芸会～日本から世界へ～』》というテーマの演芸会が開かれました。出演は菊太郎さんをはじめ、広島被爆三世の講釈師・田部銀治さん、山本宏親江会会長、そして文画師のGanjiこと親江会会員の曽我篤さんです。

菊太郎さんの出し物は、新作落語の「母のお守り」でした。

トークショーでは、被爆した人々の大多数は一般市民で、小中学生も多かったことや、原爆投下は事実上の原爆実験であったことに触れ、「なぜもっと早く終わらせてくれなかったのか。アメリカ兵自身も被爆していた」ことなど含め、被爆当時の街の様子が語られました。

また、山本会長は、被爆から10数年経っても母親の体から飛び散ったガラスの破片が出てきたことに触れ、「こういう話をした夜には必ず辛い過去の夢を見る。それが辛い」と語られました。

トークの最後に菊太郎さんは、「山本会長には、あと20年は頑張っていただきたい」と笑いで締めくくりました。平和を考える会と演芸会というと、一見ミスマッチと思われがちですが、その話の内容は平和への願いで繋がっていました。

被爆三世の講釈師。田部銀治さん

演芸会で平和トークという新しい形

♫平和コンサートのお知らせ

秋の恒例となりました、歌と音楽で平和を繋ぐ『第22回江戸川平和コンサート2026』が開催されます。今回の出演は、うたのおにいさん・たいらいさおさんとヴァイオリン奏者の三浦万帆さん、ピアニストの西優香子さんです。三浦さんには、セルゲイ・パルチコフ氏の被爆ヴァイオリンを演奏していただきます。また、区内中学生による『原爆の詩』の朗読や、合唱団による『青い空は』他の合唱を予定しています。入場には申し込みが必要となります。詳細が分かり次第親江会ホームページにてお知らせいたします。

日時 2026年11月22日（日）
13時開場、13時30分開演
タワーホール船堀 5階小ホールにて

葛西祭で水飴屋をやります！

10月18日(日)、葛西区民館隣にある滝野公園で行われる葛西祭りにて、今年も親江会のブースを出します。平和を祈る折り鶴コーナーと、毎年、子どもからおとなまで、行列ができるほど人気の水飴の模擬販売を行います。皆様のお出でをお待ちしております。追悼碑のすぐ横です。

日時
2026年10月18日(日)
10時～15時半　滝野公園にて

感謝　2026年3月～8月　応援ありがとうございます

親江会会費納入

塩崎　清子　　佐野　冴子　　有岡　道夫
堤　　竹義　　大楠　武徳　　杉原　敬三
西村　一郎　　横山　　力
西村　晶子　　高島　昭子　　署名活動等
中川　信子　　板鼻　慶子　　平和活動に
秋元　民子　　津田喜代子　　賛同の皆様
山内　紘一

寄付　原爆犠牲者追悼式にて

安養寺（渡部信教）
宇田川　耕史
江戸川区平和運動センター
江戸川健康友の会
江戸川原水協
東京都教職員組合江戸川支部
熊野会母の会
泉福寺
上田　アイ子
田部　和彦
田中石材
東友会
渋谷　俶子
世代を結ぶ
　平和の像の会
西田　ミヨ子
前田　成子
羽生　恭子
立正佼成会江戸川教会
他追悼式
　ご参列の皆様
（敬称略、順不同）

◆編集後記◆

◆暑かった夏から急に肌寒くなり、長雨、そして本格的秋の到来です。最近は〝四季〟ではなく、夏と冬の〝二季〟と呼ばれているそうですが、おかわりありませんか？◆まず、来年の《新年の集い》のお知らせです。1月17日(日)、場所はいつものグリンパレス2階高砂羽衣です。演目は企画中ですが、出演してみたい方はいらっしゃいませんか？ダンス、歌唱、楽器演奏など楽しい演目を募集中です。ご相談ください。◆交流会報告にもあるように、追悼式の運営の主体が、追悼式の会から親江会に替わりました。滞りなく進行できるよう勤めて参ります。気温の変化が激しい季節、お体ご自愛ください。